

解題・翻刻

加藤寛一氏の軍事郵便について

佐藤憲一

1 加藤寛一氏の略歴

加藤寛一氏は、大正九（一九二〇）年三月十日岩手県和賀郡藤根村（現在の北上市和賀町藤根）に、農家の長男として生まれた。

父は長七（一八八七～一九五六）、母はアサ（一八九二～一九七三）。兄弟は姉ハツミ（一九一三～三三）、妹キミノ（一九二三～）、同タミ（一九二五～）、弟高夫（一九二七～四六）、同長幸（一九三三～四〇）である。

昭和十五年五月藤野において徴兵検査を受け、甲種合格（『真友』昭和十五年四月、同七月号）。弘前（未詳。歩兵三十一聯隊か）へ入隊し、昭和十六年一月弘前より北支へ派遣された（『真友』昭和十六年三月号）。

北支では隊付衛生兵を命ぜられ、〇〇陸軍病院で教育を受け衛生兵として活躍された。昭和十九年五月二十九日西部ニューギニア、ピアク島モクメルで戦死。二十四歳。陸軍衛生曹長。

北支から南方への転戦の時期は不明であるが、昭和十八年六月頃まで北支にいたことは高橋峯次郎に寄せた北支からの便りで明らかである（『真友』昭和十八年六月号）。

2 加藤寛一氏の軍事郵便

軍事郵便は全部で十一通。全て家族に宛てたもので、現在の所有者は妹の加藤タミ氏（北上市和賀町藤根）。今回、所蔵者の特別の計らいで

全文を翻刻することを許された。

十一通の内容については、別掲の一覧表をご覧いただきたい。全て昭和十六年のもの。この年一月弘前より北支へ派遣され、任地から家族に宛てて認められた。

内容は、任地での生活、特に衛生兵教育についての報告が多い。また、多くが残された家族への気遣い、特に農作業に勤しむ父母、姉妹弟らへの励ましといったわりの言葉に彩られている。身内であればこそ打ち明けられる心の中が綴られている。

ほかに組合婦人部から贈られた慰問袋へのお礼、『真友』が届いた歎び、高峯先生への謝辞、故郷の運動会の思い出等々、故郷との絆も強い。恩師高橋峯次郎には度々便りをしていたようで、『真友』にもそのつど紹介されている（昭和十六年五月二十日、同九月二十日、同十二月二十日、十七年三月二十日、十八年六月の各号）。

3 加藤タミ氏からの聞き取り

〇兄の戦死の知らせは、終戦後一年位たって届いた。いつかは帰ってくると思っていた。生きていると思っていた。

〇兄の葬儀で花巻まで遺骨を受け取りにいった。小さな木の位牌が入っていただけで、骨は無かった。

〇兄は筆まめで、二週間も出さないうでゴメン、と書いた手紙もある。

〇戦地へは何度も慰問袋を送った。

〇本（小説など）も送った。

〇兄は頭が良かった。除隊後は医者になるのが夢だった。

〇千人針は半年位かかった。途中で止めようと思ったが、母に励まされた。

〇毎月十五日に金ヶ崎八幡へ一人で弾除けの祈願祭に行った。大勢の人が詣っていた。

○弘前の兄に会いに行った。母の伝言は「頑張ってエライ兵になってこい。楽はするな」だった。

○母は八十二歳まで生きた。私も子を失っているので、子を失った母や父の苦勞、悲しみがよくわかる。

4 翻刻 11通の軍事郵便

1【はがき表―軍事郵便】

大日本帝国

岩手県和賀郡藤根村

字藤根割田

加藤 長七 様

北支派遣軍井関部隊

氣付菅波部隊及川隊

加藤 寛 一

【はがき裏】

加藤、御蔭様で無事北支の任地に着いた。其して又、一生懸命に教練をしてゐる。支那は矢張り寒い。弘前にくらべられなくても、此の頃は暖くなって春になった。雪は降らない。心配する事は無い。皆に手紙を出せないから、家の人から宜しく頼む。手紙を一番楽しんだ。皆、体を大切に。後から又手紙を□□

(昭和十六年カ)

2【書簡―軍事郵便】

大日本帝国

岩手県和賀郡藤根村

藤根字立野

加藤 タミ 様

【封筒裏】

北支派遣軍篠塚部隊

西村慶部隊 兵舎

加藤 寛 一

【本文】

其の後も又暫く御無沙汰致したね。□□^(破損)□□は無いかね。加藤も達者だ。其して一生懸命に軍務に努力してゐる。心配するな。

其れから二月二十四日付ヲ以て加藤は隊付衛生兵を命じられ、目下○^ヲ陸軍病院に来て教育を受けてゐる。宜く家の方で言ふ医者の方だ。何んでも本科と変らない軍人だ。努力すれば衛生部員でも偉くなる。

必ず立派になつて見せるからね。

当分此處にゐて教育を受けてゐるから、手紙は表記の通り書いて寄こせ。

高橋治四郎君ノ餞別の事は、到着したらう。必ずさうして呉れ。

加藤は今一人だけ秋田県人と一緒になつてゐるが、皆優しく教へて呉れる。

又班長殿は軍曹の方で、寒^{サカ}河江^{カキ}潔^{キヨ}殿だ。班長殿は加藤も様々御厄介になつてゐる。だから字が下手でもいい、から御前度々班長殿に御手紙差上げて呉れ。

其れから寛一がおらなくとも、外の家に仕事は負けるなよ。体を大切に勤んだ。

タミ 寛 一より

外家内一同へ

(昭和十六年)
三月二日

西村部隊	陸軍衛生中尉 中村四郎
検閲済	

3 【書簡―軍事郵便】

岩手県和賀郡

藤根村字割田

加藤 タミ様

西村 部隊	陸軍衛生中尉 中村四郎
検閲済	

【封筒裏】

北支派遣軍篠塚部隊

西村慶部隊兵舎

加藤 寛 一

(昭和十六年)
三月九日

【本文】

今日は日曜日だ。

昨夜も家の人々の夢を見たが、変り無いか。二晩共、家の夢を見たんだ。加藤は此の通り元気だ。支那にも暖い春が来た。家の方も春が来たであらう。もう田打も始める頃だ。体が一番大切だ。御前達が一生懸命に働いて、少しでも父母に苦勞掛けるな。遠く離れてゐると、父母の有難さがしみじみと深く思われる。御前にも段々に解る時が来る。兄がゐない中は御前に頼んで来た筈だ。宜しく家の事を頼む。其して先ず健康である事だ。火の用心も大切だ。家の中の清潔整頓、電気に注意する事、仕事に追はれるな、総て御前に責任がある。電気等には良く注意せよ。^(上脱カ)寛一の事は心配する事は何も無い。家にある時よりもおいしい食物で、着物も立派なのだ。寛一の好きな肉は毎食だ。之で帝国軍人の一員にして戴くのだ。班には上等兵等がゐて、何んでも教へて呉れたり、無いものは買って来て呉れるし、何も不自由はない。

其の外、たびぐ酒や御菓子等が上る。

寛一は酒は飲まないが、此の通り家にゐる時は菓子を多く食べてゐたら、菓子は一番好きだ。
では、宜しく頼む。又後で。

4 【書簡―軍事郵便】

岩手県和賀郡

藤根村字割田

加藤 長七殿

西村 部隊	陸軍衛生中尉 中村四郎
検閲済	

【封筒裏】

北支派遣軍篠塚部隊

西村慶部隊兵舎

加藤 寛 一

(昭和十六年)
四月二日

【本文】

其の後も変り無いだろうね。皆達者だと思ふが。セトさんは男子を生んだってね。又従弟^{イトコ}が一人増えた。

今日は家の方から手紙、葉書等四、五枚来た。
^(高橋孝次郎)高峯先生の真友が一番面白かった。

丸で家に帰った様な気がした。

真友の為になる事は、こうした遠い戦地に來てゐると益々思われる。

家の人々も皆高峯先生に御礼を言ふと共に、寄付金募集してゐる時^(ハ)ハ、二銭で三銭でも良いから寄付金に出して呉れ。

皆達者で外に出て働く事が出来てさへるれば俺は手紙は出さなくともい、んだが、矢張り兄の楽しみは故郷に便り出すのは一番面白いんだ。

昌教（マサノリ）さん達より折角戴くよ。有難いもんだ。

今日は神武天皇祭で、朝から休みだ。学課はない。もう少し立つと此の病院の創立記念日で運動会や演芸会等あって、一日愉快地遊べるさうだ。

運動会は病院の側にあるグラウンドでやるんだ。唯、家の学校の様に桜の花をあびて走るのはないよ。

家の運動会は何時かな。あの桜の花の散る下で、赤い布を首に掛けて、良く威張ったものだ。

柔道と角力は^{（毎カ）}年続けて優勝した頃思い出される。

神社で角力をした時、遠くで母も泣いたり笑ったりして見てゐた事もあった。家の方は天気はい、かね。

苗代には種を蒔いたろう。苗代の水の加減は良く御前達が立派に見て歩いて、良い苗を作って植えて呉れ。

常に言ふんだってね。苗代半作と言ふ。今年も兄がいなくて非常に辛い事であらう。我慢して呉れ。

去年長幸君の為に兄もひどい目に合ったが、矢張り長幸は生きて呉れば良かったと思ふ。

あの時は病気の事も知らないし困ってしまった。大体に於て今の様に覚えてゐたら、あの位痛い目にさせないですむんだが、矢張り何も知らないと駄目なもんだね。良く清潔にして置いて呉れ。

不潔にすると病気になるからね。

今気付いた。兄の貫った祝旗（長イ旗）だね。あれ等は家に置けよ。何かに使つてはいけない。

君野は子供を生まないか。知らして呉れ。兄は待つてゐるんだが。

明、勇八君、善一君等、今度御嫁さまを迎へたつてね。侃君（簡藤兵工）ももらつたとの事だが、何處からだね。

検査前は早いと思つたよ。

余り早くすると駄目だ。軍隊にはそんなに来てゐない。

其れから黒沢尻付近で軍隊衛生学とか何かい、本があつたら買つて送つて呉れ。唯、地方で使ふのでは駄目だ。軍隊と言ふ事がなければ駄目だ。

其れに似てゐるものがあつたら送つて下さい。なかつたら良いからね。自転車これはないであるかな。誰も持つて行かないか。

こはさぬ様に使ふだね。

此ノ頃写真を撮つたから一枚送る。とても高くて撮れないよ。四枚で一円だ。其れにこんなうすい写真だ。どうだ此の模様。

では皆体を大切にしてお働き下さい。苗代の水等、十分に注意して下さい。

家内一同様

兄より

5 【書簡―軍事郵便】

大日本帝国

岩手県和賀郡岩崎村

山口島ノ口

小原 君 野 様

【封筒裏】

北支派遣軍篠塚部隊

西村慶部隊

加藤 寛 一

【本文】

西村 部 隊	陸軍衛生中尉 中村四郎
検閲済	

其の後、又暫く御無沙汰したね。御前達元気か。何時か家で慰問袋送ったと便り呉れたが一昨日待ちに待った慰問品が届いた。俺の好きな食物□り入って喜んで食べた。其れに割田組合員や婦人会の皆様より熱誠溢る、慰問文迄入っており、泣いて読んだり笑って読んだり数々だ。もう家の方も田の仕事に取り掛つゝる事(て脱カ)でせう。でも山口は割合に遅いから未だかも知れない。山口に手紙を出さないでほんとに済まない。今後書いて上げる積りだ。俺の事は心配する事は無いから、御前達体を丈夫にして山口の人々の教へを受けて働いて呉れ。

御前は家にゐる時から体は強かったが、餘り短気なので、兄は一番心配するからな。

桜の花も咲く頃だ。北支は桜も何も無い。花と言へば一種、何か解らないが兵舎の側に咲いて、其れを見るのが内地の花見と同様だ。

木は柳位のもので、松はほとんど見られない。後藤野の松の木を見た(入脱カ)いと思つてゐるが、矢張り支那は松の木なんて一ツも無い。もう夏だ。兄は一倍汗を流すから全く困る。

では、家に帰ったら郷土の便りを一ツ頼む。最近写した写真を一枚送る。とても高くて撮れない。山口の父さんは丈夫かね。雄吉さんに宜しく。では今度詳しく知らす。

妹江

加藤 寛 一

(内容から、昭和十六年四月末頃のものと)

6 【書簡―軍事郵便】

岩手県和賀郡岩崎村

藤根村字割田

加藤 タ ミ 子 様

【封筒裏】

北支派遣軍篠塚部隊

西村慶部隊兵舎

加藤 寛 一

(昭和十六年) 五ノ十一日

【本文】

第五号

御手紙有難う。其の後も達者だ。暫く手紙出さんので、家で少々心配したつてね。許して呉れ。

俺も度々便りを出さうと思つても、遂こうなつて終ふ。家では妹と父さん汗だらけになつて田打ちに熱中してゐるとの事。又仕事も案内進んで余すところ一日で新田に行くつて、ほんとに良く働いて呉れる。

又御前も桜花見物にも行かず、馬追ひ乍ら兄の留守をしっかりとやつてゐるさうな。

矢張り花も見たいだろう。遊びもしたいだろうが、其處に我慢して学校の幹部会に出席したり、父の仕事を手伝つたり、走り廻つて家業に精励してゐるのは、さすがに兄の妹だ……。

母達国防婦人部の人々が花巻温泉傷痍軍人療養所に慰問に行つて来たとの事、さぞ家の御母さん達や前の御母さん、後の御母さん達の立派な姿をした婦人達が慰問したら、兵隊さん飛上る程嬉しかったらうね……。はは……。何れ何處に行つても良いが、母さんも体を悪くしない様にやつて呉れ。
父さんは大丈夫か。汗だらけになつて鉢巻ハチマキきでやつてゐる姿が良く見える。

西村 部隊	陸軍衛生中尉 中村四郎
検閲済	

又、割田組合の婦人部の下すった慰問品の礼状は、もう大分前に出した筈だ。良く聞いて見て呉れ。組合は大底の人々に出したんだが、然も写真迄送って上げた筈だ。来たから兄は直ぐ手紙を出したぞ。だから届いてゐる筈だ。皆に聞いて呉れ。今度四月八日には黒沢尻に消防演習を兼ねて桜花を見物に行くとな。

夜なんかとても眠くて手紙も掛けないでせう。今頃は一番気候も良いから、又一番眠いもんだ。あんまり昼休みを長くしてゐると、外より仕事も遅れるからな。頑張つて呉れ。

支那はもう大部夏らしくなつた。其して病院の柳の芽も青くなつて、内地を思ひ(由脱カ)させる。先頃後の柏葉正導君から手紙が来たよ。中々名文句を並べてゐたよ。御前よりずつとうまいぞ。御前は未だく下手だ。其れでも字も文句も兄の家にゐる時より上手になつて来た。之からも良く人の書いた字を読んで見て気を付けるんだね。兄の送る手紙も注意して見るんだよ。長幸さんの「シヨウジ」なんて手紙には書かないんだ。「シヨウジ」の事ね、命日と言うふんだ。此の様に御前の手紙には様々可笑しい事があるぞ。此の處はと書くのは、今のところと言ふ事でせう。其の外沢山有る。便箋は未だ届かない。母は昼休みにも働いてゐるか。あんまり働いて体を悪くするぞ。昼休みには休めよ。大分長くなつたから止める。苗(苗代の苗)も相当伸びる頃だ。ハスミ苗代は良く出来たかな。蛙が多くて困るからね。では良く皆達者で働け。二日位前に活動写真を見た。見てゐる時は内地に帰つて野中に行つて映画見てゐる気持だつた。では又。

内地の妹江

外家内一同

寛 一

7 【書簡―軍事郵便】
岩手県和賀郡

藤根村字割田

加藤 長七様

【封筒裏】

北支派遣軍篠塚部隊

西村慶部隊兵舎

加藤 寛 一

(昭和十六年(カ))
五・十六日

【本文】

第八号

今日〇しの方第五号を受取つた。

家の方もほんとに猫の手も借りたい程忙しい中を手紙を書いて下さつて、兄もほんとに嬉しかった。

又、(高橋孝次郎)高峯先生に頼んで衛生の本を買つて、直ちに送つて下さつて二重の喜びだ。

皆はもうとつくに送つて貰つて読み、勉強してゐる。家ではどんな本を送つたのか、楽しみにして待つてゐる。

此處では、今の中は本は少しか渡されてゐないし、又其の附近の町でも売つてゐないので、皆戦友は故郷から送つて貰ふのだ。

本が沢山あつても勉強しなければ何んにもならないが、集める位集めて勉強しなければ心残りがあつた。家でも色々兄の為に金を出して、ほんとに済まない。兄の入営以来、大分金も出したし、借金もしたらう。家の者には一生懸命に働いて貰ふし金は使ふし、ほんとに済まん。

然し仕方がない。兄も一生懸命にやるから我慢して呉れ。

手紙の中には桜の花が入れてあった。知らずに明けたら、ぼたりと落ちた。良く見ると、大分変わった色の桜の花だ。

あ、此の時は、ほんとに家の人々を兄は遠く家に向って拜んだ。

其して急いで手紙を読んで見ると、内地の花を兄に一目見せたいと、何處から持って来たのか、入れてやれと母が言ったさうね。多分良く見ると神社の東にある桜の様だった。

有難う。矢張り色も変って仙造殿が入れてあったのは学校の八重桜で、家のは少し色が悪い。

聞けば大久保の源右衛門君帰○したさうね。全く喜こんであるだろう。

源九郎さんどれ程喜んでゐるか。

之から家で働く気だろう。階級は一等兵になって来たか。

もう二ヶ月暮したのかな。早いものだね。本家にも馬が死んだとの事だ。此の手紙と一緒に出すから心配するな。

今日は之で止める。便箋は十日□り前に届いたから心配するな。本も追って着くから心配するな。

では皆体を大切にしてお働け。又餘働いて倒れる(タラレル)。先ずは。

長七

外一同江

加藤

8【書簡―軍事郵便】

岩手県和賀郡

藤根村字割田

加藤 高 夫 様

西村 部隊	陸軍衛生中尉 中村四郎
検閲済	

【封筒裏】

北支派遣軍篠塚部隊

西村慶部隊

加藤 寛 一

(昭和十六年)

五月三十日

【本文】

第八号

変り無いか。

今日も手紙を出さず、読んで呉れ。

家に手紙を出すには一番面倒が無くて良い。何んな文句でも、まづい字でも、タミが判じて読んで呉れるからい、よ。

忙しいだろう。俺が田植には手伝ひに行くからね。うまいものを作って待つてゐろ。うまいものと言へば、うまい魚だ。兄の小さい時には猫から生れたんだ。

まあ、魚と油揚(アブラアゲ)位のもんだ。あと何んにもいらぬ。此の手紙が届く頃には、そろく、大久保の家では西田を植える頃だ。

全く大久保は早いね。今年は大久保田植を頼んでやれ。去年は良く兄とタミが行って働いたが、本家にも行かなければならぬし、猫の手も借りた時だ。其うすれば、つまり兄の手も借りた時だ。家の苗が悪くてほんとに困ったね。なんとか前からでも貰って田植を早く終つて呉れ。

兄は手伝いが出来ない変り、手紙を何変も書いて応援するから負けるな頑張れ。

其れから今は兄達は学科の方が大体終つて実地だ。病室勤務だ。今迄習つた事を一通り病院で練習して見て、中隊に帰るのだ。

兄はあの通り細い事は駄目だ。まして工夫は出来ないから、ほんとに困

る。其れだから縋帯（ホータイ）なんかは良く捲（マ）けないよ。が、心配するな。何んでも練習すば出来（れ脱カ）ない事は無い。一人前の者になつて行くからね。

一人前の者にならねば、家に帰らんよ。だから一生懸命にやっけてゐる。兄達と一緒に来た人達は、皆戦争をしてゐるんだ。ほんやりしてゐられない。まして此處は西を向ひても東に立つても敵だ。ほんやりしてゐれば殺されるぞ。

早見君達一等兵に進級して、度々家に手紙を寄こすであらうね。

兄は其んなのは問題にあらずだよ。

内地も暑くなつたらう。清逸さんから良く聞いた様に全く暑いね。

コムギカラも被れないし困るよ。

だが、良く家にゐる時鼻血が出たが、今は一回も出た事は無い。

体は益々太るし、困つて終ふ。何んとか痩せたいんだが、余り毎日うまいもの許り食べさせるので肥る。十九貫は楽にある。

其れから皆は時計だ、万年筆だと毎月の如く家から送つて貰ふが、兄は未だ時計はこはれた事は無い。之で六年になるが、機械は一つも取変へない。ガラスは一変（マ）こはしたが、あとは大丈夫だ。良く動いて呉れる。万年筆も此の通り、すらくと書けるし有難い。皆家の皆が八幡参りをしたり、祈つて呉れるからだ。

今後兄の御膳（ゼン）には、御飯を少しづつ、分けて呉れ。余り太つて全く恥しいよ。其うで無くてもこんな体であるのに。うまいものは沢山、うまくないものは少しね、上げて呉れ、ハハハ……。

酒は度々飲めるが、兄は未だそんなに飲んだ事は無い。心配するな。

今晚は大分可笑しい事を書いたね。昼休みか夜と言つても眠いから暇の時読んで呉れ。

忙しいから体を大切にしてくれ。

衛生の本送つて呉れたさうだね。あと五日位で届くと思ふ。

何んでも届くから心配するな。手紙より十日位遅いのである。

待つてゐるよ。今晚は不寝番（フシンバン）だから之で止める。良く火の用心。皆体を丈夫にして、田植を無事に終つて下さい。田植中兄は良く手紙を出す気だ。御父さんは田植に用ひる水を藤三郎さんから頼め。では先ず。

高夫

兄より

外一同殿

9【書簡】

（昭和十六年）

六月二十九日

※封筒が失なわれているため、宛名・宛先不詳

【本文】

暫く御無沙汰したね。随分待ちた事であらう。俺も大分家の方に手紙を待つてゐる事であらうと思つて暮してゐたが、前に書いてやった如く、第二期の検閲で家の事を考へるひまも無かつた。其して此の十四・五日間、一生懸命に勉強したぞ。其して無事に昨日検閲を終つて、今日は日曜日で休んでゐるので、もう大分長い二週間か三週間も手紙を出さなれたから、久し振りで手紙を書く。

検閲は我々の総仕上げだ。一生懸命にやらなくては、立派な成績は得られない。もう毎日夜十二時近く迄、勉強するのだ。

いやほんとに辛かつた。人に負けたくないから、皆真面目に勉強する。俺も何糞（ク）と頑張り通した。手紙の好きな俺だって、もう家には手紙を出さなで一生懸命に力のある限り勉強した。

しかも、此處は各中隊より頭の立派な人許りが集つて勉強してゐる。だから俺の様に百姓からぬけて来た男は、ほんとに少い。

皆鉄道員、会社員、教員の様に、ものを良く知つてゐる立派な人許り集つてゐるので、俺の様に貧乏な者は、此處に来るのでは無かつた。

然し之も運だ。良い運か悪い運か、俺も解らない。

何故此處に來たかは、俺が家に帰ったら教へて上げるから。

何れこうした人達で血まなこになつて勉強してゐるので、手紙誰にも出さんのだ。許して呉れ。

之からは手紙は出せる事と思ふ。

其れから、手紙は大体十日で来るし、小包は二十五日位で届くが、新の七月二十日からは家で手紙を今の部隊に寄こすな。七月二十日を過ぎれば此處にゐないから（手紙が来る日）最初に書いた手紙の如く書いて呉れ。つまり北支派遣軍井関部隊、菅波部隊、及川隊と書いて呉れ。

但、七月二十日前は今迄の如く書いても来るがな。

先ず第一、昨日は家から手紙が來た。開いて見ると、田植を無事に終つたとの事、ほんとに安心した。然も皆より早く終つたとの事、全く皆の御陰様だ。御前達も良く働いて呉れるからだ。

其れから、あの人達には此の手紙と一緒に手紙を出して置くから、心配するな。

之からも仕事に追はれず頑張つて呉れ。昨日來た手紙には、民子が大連だつて役に立つと書いてあるのを見て、一人で大笑ひをした。大連なんて兄はコヤツコ、ニペラなくなつたぞ。

御前達も大分苦労するであらう。

父母も元氣か。田植を終つたら、体を充分に休まして呉れ。

兄達の事は心配いらん。

もう大分暑い。八十五、六度位ある中を真黒になつてやつてゐるから心配するな。田植終つた時、うまいものを食べたそうだが、兄はそんなもの毎日だ。

御前達よりうまいもの食べてゐるぞ。キミも達者でゐると何よりだ。

先頃電氣の事を書いて寄こしたが、十分注意して呉れ。

大変な事になるから。高峯先生から真友を送つて貰つた。俺の事も書いて寄こした。

又直ぐに手紙を書くから之で止める。今度は何回も出すからね。

今日はこれからキミノにも山口にも書くから全く忙しい。

皆体が丈夫であれば、何よりだ。

兄も元氣ます〜元氣で、ふとる許り。

馬を大切に。猫を大切に。

父母は一番大切に。では後便で。

家内一同

（昭和十六年）
六月二十九日

寛 一より

10 【書簡―軍事郵便】

岩手県和賀郡

藤根村字割田

加藤 高 夫 殿

北支派遣軍篠塚部隊

西村慶部隊

加藤 寛 一

【本文】

皆達者か、兄も元氣だ。先頃撮した写真が出来たから送る。

之は此の間迄、此の病院に來てゐた岩手県看護婦で、今ゐない。病院から行く時、兄と一緒に入隊した人々が一緒に撮したのだ。

之が皆郷土県人だ。班長殿と上等兵殿は岩手県人ではないが、入つて撮して呉れた。

兄の班長殿や上等兵殿ではない。

西村 部 隊	陸軍衛生中尉 中村 四 郎
検閱 済	

裏に皆名前を書いて上げる。

此の間は写真を撮らないから無い。之があつたから送る。

皆見て呉れ。

然し此處の病院にあるのも、あと少しだ。之からは中隊に帰って戦闘に出るぞ。

今まで習つた事を皆教へる事を、今度は□代に依つて果すのだ。

此の頃は暑くなってほんとに困る。こんなに暑いとは思はなかったが大分暑い。

服なんか、もう毎日汗だらけだ。

早見君の御父さんから葉書が来た。俺も出して置く。

今日も忙しいから後で書く。写真はキミノにも見せて呉れ。

良く体に注意して働いて呉れ。

暫く写真は送らなかつたから、見たいであらうと思つて、こんな写真を送る。

では、後で。皆元気で頼む。

高 夫 君 (昭和十六年)
七月四日

寛 一

外一同

11 【絵はがき】

岩手県和賀郡

藤根村字割田

加 藤 高 夫 君

北支派遣軍篠塚部隊

西村慶部隊

加 藤 寛 一

【本文】

此の葉書は弘前から持って来たのだ。其して弘前の言葉だ。

だんだん忙しくなるに付れて、体も疲れるであらうな。馬を肥らせてね。宜く運動させろ。柱君はとても字が上手だよ。御前も上手になり給へ。宜く勉強して立派な人間になれ。忙しいから、又後で。

(昭和十六年カ)

註(一) 内年月日は翻刻者による。

(仙台市博物館、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(二〇〇二年四月一〇日受理、二〇〇二年六月二八日審査終了)

加藤寛一氏の軍事郵便一覧表

No	年月日	発信時の所属	宛て名・宛て先	形式	内容
1	(二六) 三・二	北支派遣軍井関部隊気付菅波部隊及川隊	藤根村字藤根割田 加藤長七	はがき◎	北支着任の挨拶。
2	(二六) 三・二	北支派遣軍篠塚部隊西村慶部隊兵舎	藤根村藤根字立野 加藤タミ	封書◎	勤務に精励、安心しろ。隊付衛生兵を命ぜられ、○陸軍病院で教育を受けている。努力すれば衛生兵でも偉くなる。かならず立派になって見せる。仕事で他家に負けるな。
3	(二六) 三・九	北支派遣軍篠塚部隊西村慶部隊兵舎	藤根村割田 加藤タミ	封書◎	家の人々の夢を見た。一生懸命働いて、父母に苦勞を掛けるな。遠く離れていると、父母の有り難さがしみじみ思われる。健康に注意、火の用心、清潔整頓、電気に注意。何も不自由なし。
4	(二六) 四・二	北支派遣軍篠塚部隊西村慶部隊兵舎	藤根村字割田 加藤長七	封書◎	『真友』届く。面白かった。高峯先生に御礼を。病院の運動会・演芸会が近い。故郷の運動会の思い出。良い苗を植えてくれ。長幸の死(昭一五・六・一〇)。出征祝旗の保管。君野の出産。衛生の本を買って送れ。自転車、壊さぬように。写真を送る。とても高い。
5	(二六) 四末カ	北支派遣軍篠塚部隊西村慶部隊	岩崎村山口島ノ口 小原君野	封書◎	慰問袋届く。慰問文、泣いて読んだり笑って読んだり。北支に桜はない。最近撮った写真を送る。ご主人始め、小原家の人々に宜しく。
6	(二六) 五・一一	北支派遣軍篠塚部隊西村慶部隊兵舎	藤根村字割田 加藤タミ子	封書◎	割田組合婦人部の慰問袋への礼状。国防婦人会の慰問。活動写真を観た。
7	(二六) 五・二六	北支派遣軍篠塚部隊西村慶部隊兵舎	藤根村字割田 加藤長七	封書◎	衛生の本、送ってくれて有り難う。同封の桜の花、故郷を想う。皆体を大切に。
8	(二六) 五・三〇	北支派遣軍篠塚部隊西村慶部隊	藤根村字割田 加藤高夫	封書◎	田植え、大変だろうが頑張れ。兄は学科が終わり、実地の病室勤務となった。
9	(二六) 六・二九	(北支派遣軍篠塚部隊西村慶部隊)	(家内一同)	封書	封筒が失われているため、宛て名・宛て先不詳。しばらく御無沙汰。無事、第二期検閲終了。ここ二、三週間、その猛勉強で手紙書く暇なし。皆に負けたくない。七・二〇以降は最初の部隊(井関部隊 菅波部隊及川隊)宛て手紙寄越せ。田植え、ご苦勞さま。高峯先生より『真友』届く。皆、丈夫で。馬を大切に、猫を大切に、父母は一番大切に。
10	(二六) 七・四	北支派遣軍篠塚部隊西村慶部隊	藤根村字割田 加藤高夫	封書◎	病院で撮った写真を送る。病院にいるのも、あと少し。中隊に帰って、戦闘に出る。
11	(二六) 未詳	北支派遣軍篠塚部隊西村慶部隊	藤根村割田 加藤高夫	はがき◎	馬を肥やせ、運動させろ。勉強して立派な人間になれ。

(註) ◎は「軍事郵便」の判あり